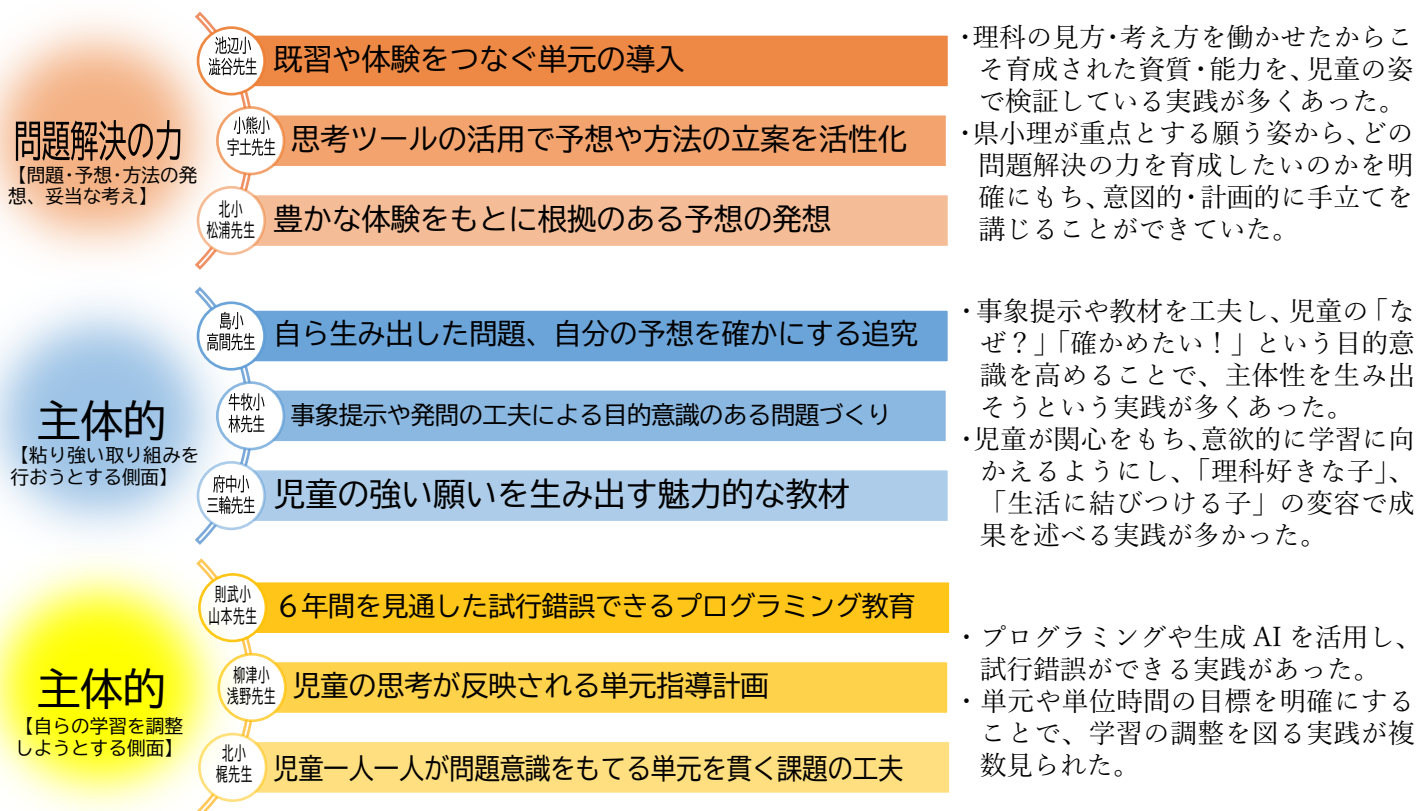


岐阜県小学校理科研究部会 令和7年度の振り返り

文責：県小理研推長 堀 祐太郎

I. 成果（研究員による実践より）



II. 課題（研究員による実践より）

- 小理研が重点とする、願う子供の姿に追加された「自らの学習を調整しようとする側面」の実践が少ない。
- 予想や実験方法を発想する過程においても、自分の考えを見つめ直し、修正をはかることは重要である。しかし、県小理の願う姿には実験後にしか位置付けがされていない。
- 教員の手立てや指示が、具体的かつ直接的なものが多。ICTなども、テーマに直結するような活用方法とは言えない。テーマに掲げる「自ら問題を科学的に解決」とは、自立的に解決する子が育つことを願っているため、新たな手立てや指導援助が必要。

III. 次期学習指導要領に向けた動きより

2 多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方

- 興味・関心や能力・特性に応じて子供が学びを自己調整し、教材や方法を選択できる学習環境デザイン的重要性、デジタル学習基盤を前提とした新たな時代にふさわしい学びや教師の指導性の在り方

主体的な学びの伴走者、学びの設計者へ

【初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（令和6年12月25日：中央教育審議会諮問）主な審議事項より抜粋】

IV. 来年度に向けて

- 1 回目の研究員会、県小理研究概要説明の時に、研究構想を説明するとともに、例となる実践を紹介する。
- 振り返りは単位時間や単元レベルでなく、問題解決のそれぞれの過程においても生じるものであり、「見つめ直し、新たに考え直す」ことが問題解決に重要である。各研究員会、担当者とのやりとりを通して、伝えていく。
- ・ 児童が願う言動をしなくなるように発問したり、もしくは、無意識下でも表出されるように長期を見通した指導を行ったりしていくことの大切さを、理科教育講座1回目の県小理研究概要説明の時に、過去の研究員のものや小理研派遣講師の実践例から紹介する。
- ・ 科学的に解決するための「自己選択・自己決定」をキーワードにして願う子どもの姿に位置付け、学習者が主体となるような改善をねらう。例えば、「実験道具や方法」、「学習問題」、「日常への適用場面」などの選択肢を自分で発想したり、「実験をやり直す」、「他者や他班の結果を見に行く」、「実験を行う人数や形態」などを自分の意思で決定したりする学習が考えられる。